

チェック!

定期的な健康診断で 病気の傾向を把握



今回のテーマは 豚の肺炎の原因となる病原体についてです。

春や秋など季節の変わり目は昼と夜の気温差が大きく、体調を崩す豚が多くなります。この時期は肺炎・下痢による事故率の上昇や生産性の低下等の問題が発生しやすくなります。

Dr.ジニアのクリニックセンターでは、定期的な農場の健康診断のほかに、肺炎・下痢等が発生した際には原因調査のための検査を実施しています。

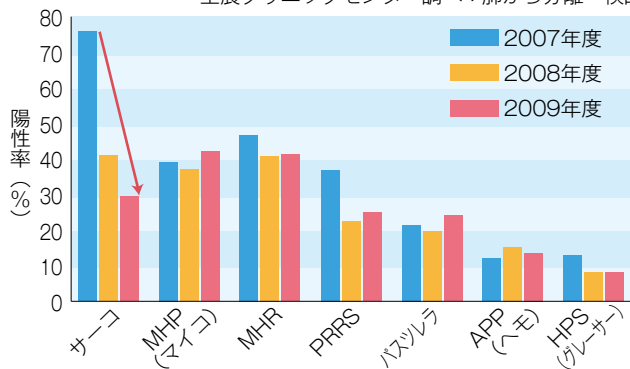
今回は Dr.ジニアのクリニックセンターで実施した子豚・肉豚の肺からの病原体の分離・検出結果を基にして、肺炎の原因となる主要な病原体の動向について紹介します。

● マイコプラズマは依然として農場に浸潤

2007年度から09年度に実施した、肺炎の原因となる主要な病原体7種の分離・検出陽性率を下図に示しました。

各種病原体の陽性率の推移 (2007～2009年実施)

全農クリニックセンター調べ：肺から分離・検出



サーコ (PCV2) の08年度、09年度の陽性率が07年度に比べて顕著に減少していることがわかります。08年にワクチンが発売され、その後の普及により、子豚段階でのサーコウイルスの動きが抑えられた結果、陽性率が減少したと考えられます。

サーコワクチンの接種により、サーコウイルス関連疾病による事故が改善されている農場も多くあると思います。しかし、季節の変わり目にはやはり肺炎による子豚・肉豚の事故が発生しています。

右表には09年度の肺から分離された主要な病原体7種の農場陽性率を示しました。*マイコプラズマ肺炎の原因菌であるマイコプラズマ・ハイオニューモニエ (MHP) が62%と最も高い

豚の各種病原体の農場陽性率 (2009年度)

病原体名	陽性率 (%)
MHP (マイコ)	62
MHR	59
サーコ	50
パスツレラ	44
PRRS	28
APP (ヘモ)	24
HPS (グレーサー)	15

陽性率を示しています。次いで、*マイコプラズマ・ハイオライニス (MHR)、パスツレラ、ヘモ、グレーサーが15%以上の陽性率を示しています。01年に Dr.ジニアのクリニックセンターで実施した検査でも、マイコプラズマ・ハイオニューモニエが74%の農場から分離されています。この結果から、マイコプラズマは依然として農場に浸潤しており、引き続き対策が必要ながわかります。

● 多面的な対策とクリニック検査の実施を

今回紹介した検査結果から、サーコに関しては状況改善が見られます。一方、サーコ以外の主要な病原体については、この3年間の検査結果からは顕著な変化は見られませんでした。特に、高い陽性率で推移したマイコプラズマ・ハイオニューモニエについては PRRS、パス、ヘモ等との混合感染により肺炎を重篤化することが明らかになっていることから、引き続き注意が必要です。

対策としては、子豚段階のワクチン接種、適切な投薬と、ピッグフローの見直し、豚舎環境の改善、洗浄・消毒の徹底など多方面からの検討が必要となります。

Dr.ジニアのクリニックセンターでは定期的な豚群の健康診断 (クリニック検査) を実施し、病気の傾向の把握や対策の提案を実施しています。肺炎を引き起こす病原体の農場での動向を定期的にチェックし、対策に活用してください。

*肺炎や関節炎の原因菌。PRRSやPCV2との混合感染で症状が重篤化するとして注目を集めている